

戯れる木霊 こだま

馬場 駿

色鮮やかな木々が人に見られることを拒み、モノクロームの世界で寝むことがある。そのとき、風は止み、陽は隠れ、野鳥は黙す。地表近くに屯して、揺れ動いているはずの微細な水滴でさえ、印画紙に定着した粒子のように、ただじつとして、そこにいる。

私が口を開き何か言の葉を発すれば、きつと視界の中の全てがバランスを崩し、あの、慎みのない晴天の風景に化けてしまう。そんな気がして息を詰め、杉の幹にしがみついた。樹の皮に全てを託していた蒼い苔が、私の指に触れてずりりと滑り落ちる。そのとたん、ばらばらっと、大粒の水滴が頭上に襲いかかった。

弾け、離れて私は、そそり立つ益荒男を恐る恐る見上げた。

そこから見えるのは、私の血走った両の眼、艶を失い、いまは皺でしかない乳房の谷間、それとも一人では歩けないほどに短くなった脚……。

墨が水面に広がる。杉の葉が涙で滲んで見えるのだ。

嬉しい。あなたの怒りに触れた証だ。

また知らない雄を拾った。自分が心の奥底で求めているものを知るために。

今度の男は執拗だった。瞼を舐め、唇を啄み、脳に向かうあらゆる管に舌を這わせた。その間も、羽毛に触れ

るほどの繊細さで、五指が私の渴いた肌の上を動き回る。

悔しさで、戸惑いで、唇を噛んだ。命ごと燃え尽くしたいときさえ思った恋人に感じたもの、あれはただの欲情でしかなかったのか。どの雄犬と目合つても五臓六腑は昂まり、極まれば、理性は一欠けらもなく消し飛んだ。

そうであれば彼は、何のために、私を護って死んだのか。

こんな私の何にそんな価値があるのか。

思わず蹲った私の目の前に、濃紫の花があった。

不思議だと思った。彼と出遭ったときの、花の数と同じなのだ。

「それ、擬宝珠って名前です。もつとも花自身は名前なんか知らないで、ただ咲いているだけなんですけど」

微笑むと唇ができる男だった。

尖った葉の先から、丸い水の塊が滑り落ちた。きれいに並んだ花が一斉にお辞儀をする。水滴が、ゆっくりと大地にぶつかる音が聞こえた。

彼の、透き通るような優しさは、私を溶かした。抱かれたのではない。熱く燃えた彼を招き入れて、私は別の物質になったのだ。

・・・そう思っていた。

本当の私は、彼と一緒に逝ってしまったのか。遺されたのは「からだ」・・・
いま、内なる鏡の向こうに見える私は、淫婦でしかない。

「ねえ、しているところ、撮ってくれる」

何人目だったか、拾った男に言った。

反証が欲しかったのだ。

男は口笛を吹き、下劣な笑みを浮かべながら、ベッドサイドにビデオカメラをセットした。途中までは冷めていた。自分の本性を見極めたい一心で……。

卑しい獣が、横たわる生肉を注意深く嗅ぎまわる姿を、蔑笑する余裕があった。睡眠、催淫、避妊……さまざまなピルが創りあげた、血管すら透けて見える白い肌を、薄っすらと浮かべた涙で淨い清めることもできた。

突然、綺麗なものへの憎しみが湧いた。気がつく、私の掌の中に、千切りとられた擬宝珠の紫があった。

午前九時は回っているはずなのに、黄昏時のように薄暗い。観光地なのに、誰一人として歩いていないのも奇妙だ。

そう思った一刹那、頭の中で何かがピツと裂ける音がした。

蹲って、震えだした私。

目の前の杉の太い幹が、左右に揺れだしたのだ。

結局この日も、自分の生活の中には戻らなかった。

「先生、少しは健康に気をつけてもらわないと」

編集者が、私の生原稿を机上に置いてから、煙草を手にした。

顎鬚を焦がす距離でライターを点け、炎に内緒話でもするように、唇を寄せる。「二人」を繋げるのは、細長い白だ。

「優しいのね」と返せば、

「ビジネスですよ。先生のエッセイは金になる。倒れられて一週でも抜けたら騒ぎだ」と、煙をこぼしながら大きな口が言った。

ただ露悪的で猥褻だから受けている。文才の故ではない。

「先生は自分の売りを知っているから」

私の心の声を聞き取ったらしい。

「そのタバコ、くださる」

「え、俺の唾が付いたの、吸うんですか」

「まさか、消すのよ」

編集者が口を開け、タバコがゆっくりと落ちた。

床で弾んで、それは小さな花火になった。

濃藍の空に皓皓たる月が浮かんでいる。

その真ん丸な輝きから、外輪山の頂に何かが降り注がれている。宇宙空間でのやりとりだ。それがただの淡い雲だと分かるまでの十数秒の間、私は至福の時を味わった。

「こんな早くにお散歩に。まだ四時ですよ」

ナイトフロントが、浴衣だけでは寒いからと、半纏を探してきてくれた。

「払暁ってきれいなのよ。太陽関の露払いなの」

「はーあ…」と、頼んだドアよりも先に大きく口を開けた彼。

音の無い世界なのに、心の声だけは聞こえる。

暗いのに、いや、暗いから、自分の姿がよく見える。

だから、この「時」の静寂を選んだ。

佇たたずんでいると、爪つまさき先かかとから踵かかとまでの全てが腐蝕していくのを感じた。歩き出したらきつと、足の裏が肉ごとずり剥むけてしまいうに違ちがいない。遺いすべき足跡あしあともない私わたしだ。ちようど良いい。

一時間いちじかんなのか、数秒すうびょうなのか、身動みじろぎもしない「時とき」を過あごした後のちで、意いを決きめた。湖うみの匂においを嗅かいだのだ。刈かりり取とられた雑草ざっそうの鋭利えいりな刃先やぶきりが、下駄くだに踏ふまれてクシクシと鳴ないた。下くだる、下くだる……。

辿たどり着きくと、湖面うみが一瞬ひとしげ、風かぜを呼よんで騒さわいだ。

砂浜すなも栈橋せききょうも無ない。彼岸ひがんと此岸しがんの境さかいは、草草くさくさを生なかす土塊つちくれだった。

灌木かんぼくに纏つかまりながら湖水うみに足あしを浸ひすと、意外あいたにも温あたたかかった。

外輪山ぐわいりんざんが空そらの黒くろから漸おそく分離ぶんりされ、朝霧あさぎりを従したがわせて、私わたしの前まへに出てきた。

『まるで浮世絵』

眼めを開ひらいたまま、私わたしは、その山々やまを猩猩しやうじやうひ緋ひに染ぞめてみた。かつて火ひを噴ふいていた猛々たけだけしい姿すがたを想おもったのだ。なぜか涙なみだが溢あふれた。やがて雌黄しおうが混まざり「溶岩ようがん」とななって、それは瞬あしもとく間に足下あしもとに及およんだ。

『熱あつい。あなた、熱あつい』

立ち上たがると、急いそに半纏はんちんが燃もえ上あがり、巻まき上あがる風かぜに剥はぎ取とられた。

そそげ立つ髪かみが、笑わらいながら何度なんども頬ほを打うつ。

私わたしは浴衣ゆいを脱ぬぎ捨すて、幼児おとこのように手てを広ひろげて、裸身はだかみを燃もえる山々やまに曝あした。

「犯おかして。はやく犯おかればいいんだわ」

湖面うみが白しろい脛すねの動うごきに合あわせて揺ゆれる。

細波さいなみが股間またまに達たしたとき、私わたしは狂喜きやうきして叫こゑび声こゑをあげた。

気の弱い雄は、こそこそと、部屋の隅で制服のズボンを穿いた。

「ホテルの人間には内証にしてくれませんか」

彼には自分の質問の愚かしさが判らないらしい。

可哀相なことをしたと思った。

全裸で朝の窓辺に立つと、番の小鳥が寄ってきて私を見上げ、揃って小首を傾げた。

限度を知らない男の五指が、臀部を丸く一撫でして遠ざかる。

軽く見られた自分が悍ましく、全身に鳥肌が立った。

後ろで、ドアの閉まる音がした。

急に潤んできた眼の向うで、小鳥がチツと鳴いて飛び去った。

編集長が躍起になって探しているらしい。

金にさえなれば、芸好きな蚤さえ追いかける奴だ。

また夜明け前に旅館を飛び出して、彷徨っている。

視界が及ぶ限りの荒涼があった。

尾花の穂波が鈍い白を創って、さわさわと大地を揺らしている。

景色の中の巨きな曲線を追うと、早朝の化粧をし始めた外輪山に辿り着く。

そこから覗きこんでいる富士の顔は、蒼ざめて白い。

本来見えるはずがない富士は、きつと亡霊だ。

「あなたなのね」

隠れるように草叢くさむらに駆け込んだ私。

はずみで左の手首が切れた。凶器すずきは薄の葉だ。

身を縮め、獣の真似をして血を舐なめる。

草いきれが、頼みもしないのに記憶を呼び覚ました。

「俺にもやらせろよ、減るもんじゃねえだろ」

言葉と同時に、臭い口が、眼と鼻の先まで迫っていた。

「好きなんだろ、外でやるのが」

恋人かれが、殴られて変形した顔を突き出し、暴漢おとこに組みついてきた。

男二人の体の大きさは、倍ほども違う。

払われても、蹴られても、何度も何度も、めげずに絡みつく彼。

私は、彼の命懸けの誠に涙した。

苛立った暴漢の本気の一撃で、彼は石の上に倒れ、頭から真っ赤な血を噴きだして、死んだ。

暴漢は性欲を殺そがれ、生じた結果おのに慄おのいて遁走した。

私の操みさおは護られた、確かに……。でも、それが何だというのか。その代償が、彼の生命いのちなのだ。あんなに殴られたのだから、気を失ったふりをして、私が犯されるのを見ていれば、それで済んだものを！

舐め取った血が口腔に広がるのを待つて私は、死んだふりをしてみた。

目覚めると、野原を横切る県道を車が行き交かっていた。

ふっと、添い寝をしてくれた花に気づく。

『優しいのね』

彼、富士山はもう、雲に囲まれて見えない。

ナンバンギセル。異草こてくはなに寄生する。

この花の別名が、きつと彼の書置き。

—— 思い草。

秋の野草たちが、風も無いのにざわざわと騒いだ。